

勸学寮 御中

安芸教区安芸北組 法中一同

新しい「領解文」唱和における質問状

このたび「ご消息」として発布された新しい「領解文」は、平易なことばを用いた現代版「領解文」として伺っております。しかし、『本願寺新報』には勸学寮からの難解な解説文が長文にわたって掲載され、『中外日報』にも「真宗教義に沿った解釈を基礎に持たないと誤解が生じる可能性があるため、解説を熟読してほしい」との見解が掲載されました。「ご消息」は真宗門徒にとって命をあずける言葉であり、「領解文」とされる以上、解説文を読めない子供達をはじめ、仏縁の浅い皆様に唱和を推奨することには、最大限の配慮が不可欠です。にもかかわらず、発布直後に勸学寮からこのような解説文が出され、誤解を危惧する見解まで紙面に掲載されていること自体、異常というほかありません。これでは門信徒の皆様に唱和を推奨することはできません。

そこで二点、ご質問致します。

①誤解を生じる危惧について

『中外日報』掲載の勸学寮の見解で「特に議論した」とありました、第一段「お念仏のころ」の以下の箇所について、重大な誤解を生じるのではないかと危惧を抱いております。

私の煩惱と仏のさとりは本来一つゆえ

「そのまま救う」が 弥陀のよび声

これは「煩惱即菩提」といわれる不二円融の理をもって、「そのまま救う」という本願の救済の根拠とされているように読めます。しかし、宗祖が「仏願の生起本末を聞いて疑心あることなし」と説いておられるように、浄土真宗の安心とは、無始よりこのかた出離の縁のない凡夫のために、本願他力の救済が成就されているという、名号のおいわれを聞くほかにはありません。したがって、領解の表出としては、

出離の縁なきわが身ゆえ

「そのまま救う」が 弥陀のよび声

という趣旨の文脈となるべきではないでしょうか。しかし、新しい「領解文」では、仏願の生起として、無始よりこのかた出離の縁なきわが身という機の真実をおさえるべき箇所に、「私の煩惱と仏のさとりは 本来一つ」という真逆の文言が示されています。自力の否定をおさえず、煩惱と菩提は「本来一つ」という真逆の文脈に続けて「そのまま」の救いを教示するならば、法義の領解を誤り、きわめて安易な現実肯定論に陥るおそれがあります。それは世俗の全面肯定という

危険思想にも繋がるものです。第一段後半で「そのまま」の救いが「このまま」と置き換えられている点についても、現実肯定論に傾斜する危険性が懸念されます。また、領解の根幹である出離の縁なきわが身という機の深信を欠如したままでは、第三段「念仏者の生活」に示されている「少しずつ 執われの心を離れます」という箇所は、自力的な理解に受け取られかねません。

このように、新しい「領解文」唱和においては、重大な誤解を生ずる危惧を抱かざるをえません。この点についてどのように考えておられるのか、ご説明ください。

なお、勸学寮の解説文では、第一段の当該箇所は「阿弥陀如来の立場から」の説示であり、「さとり智慧から衆生救済のはたらきが導き出される」と語られています。領解の表明であるかぎり、衆生の立場からの文言です。したがって、勸学寮の解説文では納得できません。

②同意の経緯について

ここまで誤解の危惧される文言の領解文が「ご消息」として発布されるにあたり、寮員会議において、どのような審議検討が為されたのでしょうか。本当に寮員和上方の同意があったのでしょうか。勸学寮内の手続き上に瑕疵はなかったのか、不審を抱かざるをえません。勸学寮内でいかなる経緯を経て「ご消息」発布に同意するに至ったのか、ご説明ください。

①新しい「領解文」唱和によって重大な誤解を生じかねない危惧について。

②いかなる経緯を経て「ご消息」発布に同意するに至ったのかについて。

この二点について、『本願寺新報』の紙面上において、ご説明ください。

以上